

導入事例
てれたっち

「使ってみたい!」と子どもたちが一斉に手を挙げる 「てれたっち」ならではの一体感ある授業が実現しました



インフラなど様々な制約がある中での導入となりましたが、その効果を実感したという青森市立浜館小学校の皆さん。同校では「Hi, friends!」などの電子教材を、「てれたっち」で効果的に活用されています。教務主任の奥崎健二先生、5年2組担任の林のみ子先生、5・6年生の理科と算数を担当される松田祥子先生にお話を伺いました。
※先生のご紹介、学校での設置状況などは取材当時のものです。



導入商品

外付け型タッチ化ユニット
「てれたっち」

DA-TOUCH / WB

※ディスプレイは別売りです。

「児童のほうを向いたまま電子教材を操作でき、一体感ある授業を進められる

「てれたっち」のご活用状況について教えてください。

林先生:「てれたっち」は主に電子教材を利用するのに使っています。例えば外国語活動教材の「Hi, friends!」ですね。電子教材のよい所は、それぞれの手元の教科書ではなく、全員で同じディスプレイ上の教科書を見ながら授業を進められることだと思います。しかし以前は入力デバイスがマウスしかなくて、操作のたびに児童やディスプレイから目を離して、ノートパソコンの画面に向かっていました。そのたびに授業の流れが阻害されてしまうので歯がゆく感じていましたが、「てれたっち」を導入したことにより、タッチペンを使ってディスプレイの画面上で操作できるようになりました。これだと皆で同じ教科書を見ながら、一体感を保ったまま授業を進められます。

松田先生:私は算数の電子教材をよく利用しています。カラフルな電子教材は、グラフや図形の問題を理解させるのに適していると感じますね。授業は様々なスタイルで行いますが、チーム・ティーチングでは林先生が全体を指導して、私がサブで「てれたっち」を操作することも。また、林先生が黒板で指導する間、理解が追いつかないという児童だけを「てれたっち」の周りに集めてサポートすることもありました。



「てれたっち」を使ったチーム・ティーチング



電子教科書との相性は抜群

「いつもは消極的な児童も『てれたっち』で説明してみたいと手を挙げてくれます」

児童の皆さんの反応はいかがですか。

松田先生:ディスプレイに私がタッチペンで書き込めば、「ほかにはどんな色がある?」と、また、線を引けば、「太さは変えられる?」などと興味津々に質問してきますね。単にコンテンツを視聴するのは違い、タッチペンで操作できることが興味喚起につながるのだと思います。授業の中で、問題の答えや自分の考えを「発表したい人?」と問いかけても、あまり反応がよくない時もあります。しかし、「てれたっち」を使って説明してみたい人?という聞き方になると、児童たちの手は一斉に挙がります。普段は消極的で、人前に立ちたくないという児童でも、「てれたっち」ならば「使ってみたい」と前に出てくるので驚きでした。

林先生:最初は「動く」「音が出る」「色がつく」というだけのことで児童は興奮しますね。注意を引くという点では非常に優れたツールです。もう集中しすぎるくらいでして、黒板に集中させたい時は、あえてディスプレイの電源をオフにしています。モチベーションアップには確実に繋がっていると思います。

「今後の環境整備に期待。子どもたちのためにも前向きな活用を」

今後、「てれたっち」を使ってみたいことがあったら教えてください。

松田先生:インフラやセキュリティポリシーの制約があり、なかなか自由に活用できないという現状がありますが、アイデアは多々あります。すぐに実現できそうなものとしては、書画カメラと「てれたっち」の連携ですね。

林先生:インフラについては、今までの環境を当たり前だと思っていて、課題にすら感じていませんでしたが、今回の導入を契機にICTの取り組みについて考えました。とにかく環境整備あってこそそのICTですから、学校側にはぜひ取り組んでいただきたいと期待しています。

奥崎先生:現場の先生方からは活用アイデアをどんどん出してほしいと思っています。現状では様々な制約もありながら、先生方が工夫して取り組んでくれています。できることからにはなりますが、環境整備にも前向きに取り組んでいきたいと考えています。



算数でもデジタル教材が活躍

取材にご協力いただいた先生



青森市立浜館小学校
教務主任
奥崎 健二 先生



青森市立浜館小学校
林のみ子 先生



青森市立浜館小学校
松田 祥子 先生



CLIENT DATA

導入学校 / 青森市立浜館小学校
所在地 / 青森県青森市
設立 / 1885年